



# JICR.ORG 通信



手島繁一（法政大学 / 協同総研）

## 「研究所たより WEB 版」を新設

紹介が遅れてしまいました。てっきり、「お知らせ済み」だと勘違いしていましたが、わたしの思い込みでした。申し訳ありません。

なんの話かといえば、「研究所たより WEB 版」というセクションを JICR.ORG 内に新設したということです。昨年 12 月 20 日の更新から掲載しています。

もともと研究所の日常活動については、機関誌『協同の発見』に「研究所たより」として掲載することで会員の皆さまにお知らせするという手段を取ってきたわけですが、字数の制限があって十分に情報を載せることが出来ないという問題がありました。さらに大きな問題は、月刊誌掲載記事ですから情報の鮮度が落ちることです。月 1 回、しかも機関誌発刊時点では 2 カ月ほど以前の情報ということになるのですから、到底 IT 革命の時代にふさわしいとは言えません。「研究所の活動が見えない」といったお小言が出てくるのも、一つはこうした貧弱な広報手段しか持ち合わせていなかったことによるものです。

そこで坂林専務が考え出したのが、研究所の日常活動をメーリングリスト (ML) 上で発信するということでした。題して「研究所た

より ML 版」です。昨年の総会 (7 月 1 日) 後に創刊号が発信されました。

なるほどこれは Good Idea! ではありません。ただ残念ながら、ML 参加者は 50 名程度ですから、情報の伝達範囲は限られてしまいます。会員の 10 分の 1 にしか伝わらないという問題点があります。

次はわたしの出番です。会員の中には ML には参加していなくても、インターネットを利用できる方はたくさんいるはずで、それならば、「研究所たより ML 版」を Web Site にそのまま載っけてしまえばいいのでは。そうすると、インターネットで JICR.ORG にアクセスするだけで、研究所の活動がリアルタイム (^\_^;) でわかるわけですから...。ということで、遅ればせではありますが、昨年末以来「研究所たより WEB 版」が JICR.ORG に掲載されることになったのです。

「研究所たより ML 版」の発信は不定期ですが、5 月 7 日付最新号で通算 50 号を記録しました。10 カ月で 50 号ですから、月平均 5 号は発行されている勘定になります。月 1 回、2500 字に限定される「研究所たより紙 (機関誌) 版」に比べて、情報の速報性、柔軟性、情報量の豊富さなどの点において、インターネットを利用した「ML 版」「WEB 版」の優位性は明らかです。

なお、坂林専務による「ML 版」は可及的速

やかに「WEB版」に仕立て上げてJICR.ORGに掲載するよう努力していますが、時としてタイムラグが生じることがあります。つまり、「ML版」は発信されているのですが、「WEB版」の掲載が遅れるという事態が生じることがありますが、その責任はもっぱらわたしにあります。サボっているわけではないのですが、なにしろ多忙かつ低能力なものですので、皆さまには温かく見守っていただけよう、お願い申し上げる次第です。

「研究所たよりWEB版」へは、JICR.ORGのトップページからも入れますが、直行するのであれば、以下のURLをご利用下さい。

<http://village.infoweb.ne.jp/~fvgn6520/tayoriweb/index.html>

#### 【図1 「研究所たよりWEB版」目次ページ】

協同総研10周年記念集会の特集ページを掲載

協同総合研究所の設立10周年を祝う記念集会が、3月24日、東京・虎ノ門「パストラル」で開かれ、会員など80名が参加しました。「地域に芽吹く協同の営みを交流させよう」「現代における協同の意味と可能性を問おう」「実践者と研究者が協同した『働く人びと＝市民の協同総合研究運動』のセン



ターになろう」との大きな目標を掲げてスタートし、10年。社会情勢が刻々と変化し、協同の意味がますます重要になり、「協同労働の協同組合」の法制化運動も、本格的に進展する段階に到達したことを、確認し喜び合う集会となりました。

集会の模様は『協同の発見』誌や日本労協連機関紙『労協新聞』で伝えていますが、JICR.ORGではWebの特長を活かして「写真集」を掲載しました。当日、わたしが即席カメラマンに変身して、買ったばかりのデジカメでバシバシ撮りまくった写真を掲載しています。チョット古くなった情報ではありますが、集会の雰囲気やビビッドに伝えるページになっていると思います。一度ご覧ください。

<http://village.infoweb.ne.jp/~fvgn6520/10album/>

また記念集会に参加された社民党の谷本たかし議員のあいさつが、氏のホームページに掲載されています。わたしが多忙を理由に各氏のあいさつの掲載をサボっているうちに、いち早く載せられてしまったのですね。「うれしはずかし」というべきか、この辺がインターネットの醍醐味ではあるのでしょうか。



ところで、彼らに携帯電話の使い方を聞いてみると、通話と並んで「メールで利用している」という答えが多かったですね。さすがに、「Webサイトを見る」という使い方をしていない学生はほとんどいませんでした。実はわたしも昨年末、携帯電話を「iモード」対応機に買い換えたのですが、ブラウズ機能＝「Webサイトを見る」はいまいち利用しにくいし、利用価値があるコンテンツがまだまだの感じがします。

そういうこともあってか、学生自身はインターネットを利用しているという自覚がないのです。インターネットといえば、「Webサイトを見る」ことだと勘違いしているからだと思います。メールも立派なインターネットの利用術なんです。「あなた方は、もうすでにインターネットの世界の市民なんだ！」と言ってあげました。

「インターネット接続機能」を持った携帯電話の発売は1999年2月22日のことで、「iモード」対応機が先陣を切ったわけです。そ

れからわずか2年あまりで「iモード」機だけで2000万台、「インターネット接続機能」を持った携帯電話全体では3000万台が普及するようになったのです。

わたしの考えでは、「iモード」によって携帯電話のイメージは一変したと思います。「iモード」発売当時は「携帯電話にパソコンが入った」と言われたように、「インターネットもできる電話機」というイメージでした。ところが今では「電話もできるインターネット端末」と、イメージが逆転しているのです。

そのことを象徴的に示しているのが、電車の中での風景の様変わりです。携帯電話が爆発的に普及しだした頃は、電車内での携帯電話の使用が社会問題になりました。特に若者が傍若無人に電車の中で電話する事が世間の非難的になりました。ところが、わたしの主観的な観測かもしれませんが、昨年頃から、電車の中はミョーに静かになったような気がします。そう思ってふと見回してみると、若者たちは携帯電話をにらんで無言でテンキーを打っているんです。電車内で携帯電話を耳に当てて大声で話しているのは、今ではビジネスマン風か、オジサン族がもっぴらになっているんです。

「通話から通信へ」、電話の利用形態が確かに変わりつつあることを示す好個の例です。

話が脱線しましたが、わがJICR.ORGも「iモード」、「EZ Web」、「J-sky」対応のサイトを立ち上げることが必要になっています。話題のイチロー選手ではありませんが「JICR.ORGも変わらなくちゃ！」。ちょっと古いか(^\_^;)??

